

日本とは何か？

重要な糸口を俳諧から学ぶ

〜無常という循環が指し示す永続的創造〜



静岡県知事

かわかつ へいた

川勝 平太

国際日本文化研究センター名誉教授

やまお ちつお

山折 哲雄氏

日本人とは何か？

その疑問を紐解いていくと、近代化とともに西洋化を果たした日本の限界が見えてくる。

川勝平太・静岡県知事と国際日本文化研究センター名誉教授・山折哲雄氏が

日本の「知」の課題について語り合った。

〔「楳々の日本」藤原書店令和2年8月27日刊〕より抜粋、平成29年11月23日対談

軽みの重大さに気づく

知事 前回の対談は2013年の5月、テーマは、かつて先生とともに国際日本文化研究センターで研究した「日本とは何か」でした。翌6月に富士山が「世界文化遺産」に登録され、静岡県の茶草場農法も「世界農業遺産」になりました。その後、南アルプスがユネスコの「エコパーク」に、駿河湾が「世界で最も美しい湾」に認定されました。卓球の伊藤美誠さんと水谷隼さん、陸上の飯塚翔太さんが五輪でメダルを獲得し、天野浩先生がノーベル賞を受賞しました。富士山が世界遺産になったのをきっかけに、本県では世界クラスの認定ラッシュが続き、世界の檜舞台に立った感があります。21世紀になってからの日本人のノーベル賞受賞者は、自然科学の分野でイギリス、ドイツ、フランスを抜き、アメリカに次いで2位。「日本とは何か」というテーマは世界性を帯びてきました。

山折氏 今回は自分の体験をも

ほとんどが「かぶれ現象」だったという反省があります。私は敗戦の時、半分軍国少年でしたが、戦後は一転して民主主義少年になりました。その転向の中でマルクスにかぶれ、マルクスの限界が見えてくると、今度はウエーバーにかぶれ、その次はフロイトと絶え間がない。しかし時が経つにつれて全部は落ちていく。かぶれでしかなかったことに気がついたわけです。すると、今度は思想から身軽になるという問題が出てくる。これが今日の日本における知のあり方を考える上で、そしてそれ以上に自分自身の問題になったのです。

西洋かぶれからの脱却

山折氏 今、私が抱いているのは、学問の最前線にいる人や知識人がそのかぶれに気がついていないという危機感です。それを庶民にもわかる形で実践したのが芭蕉だったのではないか。俳諧の道、五七五のリズムの世界には、思想から身軽になることを探る重要な糸口があります。

とに話をしてみます。私は最近、脳梗塞で倒れました。寝ている時にスーッと意識が失われ、そのまま楽に死ぬのかなと思いましたが、私は半生の間、消化器系の病気を患い、十二指腸潰瘍、胃潰瘍、C型肝炎、急性膵炎までやりましたが、それらは痛みとの闘いで、人間の重さと闘う感じでした。ところが今回の循環器系の病気は、呼吸と意識が希薄になっていく。これは存在の軽さみたいなものだと思います。

70代から漠然と考えていたのは、思想、知識、信仰など、何とも重いものを背負って生きてきたな、ということ。しかし、それは本当の生き方だったのか、循環器系の病気になって疑問が湧いてきました。いつの間にか「人生の軽み」という言葉が浮かび、芭蕉が最終的に俳諧のエッセンスとした「軽み」という問題の重大さ、それが日本文化の根底に流れ続けてきたことに思い至りました。自分の知的遍歴を語れば、その

私はまず、書物からどう身軽になるか、という問題にぶつかりました。今まで溜めこんできた本は、一軒の家にも取まらない。研究室にあった本は、全部寄付しましたが、最後まで手放せなかったのは『親鸞全集』です。親鸞は人生の教師。親鸞とともに、親鸞の存在のために、ここまで生きてきた。その全過程をひっくり返すことになるのではないのか、それほど辛かったけれど、今年ついに手放した。ところが、不思議ですね。手放した後におそってきたのは、何とも言えない解放感でした。それで思想や信仰から身軽になることの意味、重味のようなものを実感できたのです。

知事 病気の体験から、存在の重さと軽さという問題に思い至られたとは、さすがです。衣装を脱げば無一物。無常を悟り、諦念を持てば、自然体になる。自然と一体化した境地を叙景にすれば、俳句になります。俳句が日本人の心の形に合っているのは歴史が証しています。最近の例では、静岡県立文化芸術大学の理



第1回対談より

国際日本文化研究センター名誉教授 山折 哲雄氏

1931年生まれ。岩手県出身。東北大学印度哲学科卒業。国際日本文化研究センター所長を経て、1997年より現職。国立歴史民俗博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授。著書に『ガンディーとネルー』（評論社）、『こころの作法』（中公新書）、『「身軽」の哲学』（新潮選書）ほか多数。

ヨーロッパの思想・学問の王座をしめるのは自然科学ですが、現代日本は、もはや追いかけるどころか、肩をならべています。少なくともノーベル賞の受賞者数では引けを取っていません。合理性と実証性を重んじる科学的な態度は日本人の知性の一部になっています。「日本とは何か」というテーマは、「日本が関わってきた世界とは何か」というテーマでもあり、世界の中の日本を、日本の世界を問うことです。現在の日本で、はつきり言えることは、借り物にもう嫌だという潮流です。東京は近代のシンボルですが、「ミニ東京」になるのはもう嫌だという気運が、全国の自治体に生まれています。西洋文化が日本に根付いた頃から、地域の「本物

さか」が「宝さがし」の潮流が生まれ、それは「自分さがし」の動きと連動しています。自分らしい生き方を模索する動きです。
山折氏 地域で伝えられているものの中には大事なものがたくさんあります。
知事 本県だけでも世界クラスの地域資源と人材が数多く認定されています。故郷に誇りを持ち、地元を勉強し直すと、知識が生き、実践的になります。学校だけが「学び」の場ではありません。明治以後の洋学重視の教育は西洋かぶれの時代で、そこから卒業することが現代日本の課題ですね。

循環と創造のエネルギー

山折氏 俳句のエッセンスをさらに凝縮していくと、何が出て来るか。私は「無」だと考えます。この国では文化や芸術や宗教の懐の奥に、無が姿を変えて潜んでいる、それが時に応じて爆発します。いろんな無に変わって爆発する。無は、これからますます重要な言葉になるでしょう。無我、無常、無私、無心。

り口とも言える江戸後期の良寛も自分のことを「沙門に非ず、俗に非ず」と語っている。そういう人生の見方、歴史の流れについての考え方を、戦後の日本人は教わってこなかった。学ぼうともしなかった、戦前からずっとです。
知事 近代日本の教育は、明治の学制の発布以来、中央官僚が管理するようになりましたが、江戸時代の日本には、寺子屋や私塾があつて、子どもは親や地域の大人がしつけ、庶民の子どもは地域の大人に行儀作法から読み書きまで習っていました。洋学を取り入れる目的で明治初頭に創設されたのが文部省。洋学が根付いた現在、文科省は制度疲労をおこしています。

山折氏 一種のカオスに近いかもしれない。カオスをプラスの価値と見るか、マイナスと見るか。無は崩れはじめた秩序を壊すプラス志向を含んでいる。その点でカオスはエネルギーの根本ですね。

知事 無がエネルギーとは、きわめて重要な指摘です。無常とは、同じことが続かないことですから、新しいものが出てくることです。無常というとは、かたがたイメージが先にたちますが、無がエネルギーだと言われると元気が出ます。エネルギーとしての無が偶然性、創造性、可能性をはらんだ循環を生む。単なる円環運動ではない。

山折氏 禅の世界に一円相という、丸を書く象徴図があるでしょう。あれは円環を閉じない。

知事 森羅万象を入れこんでいる無。心は無尽蔵で、無一物には無量の万物が対峙します。ある・なしの相対無ではなく、あることのないことも含む絶対無。有無の対立構造を支える底無し無の無万象の帰する無ですね。

山折氏 一種のカオスに近いかもしれない。カオスをプラスの価値と見るか、マイナスと見るか。無は崩れはじめた秩序を壊すプラス志向を含んでいる。その点でカオスはエネルギーの根本ですね。

知事 無がエネルギーとは、きわめて重要な指摘です。無常とは、同じことが続かないことですから、新しいものが出てくることです。無常というとは、かたがたイメージが先にたちますが、無がエネルギーだと言われると元気が出ます。エネルギーとしての無が偶然性、創造性、可能性をはらんだ循環を生む。単なる円環運動ではない。

山折氏 禅の世界に一円相という、丸を書く象徴図があるでしょう。あれは円環を閉じない。

知事 循環ですが、新しいものが生まれる創造性をはらんだ、らせん状の循環です。

山折氏 無一物、無尽蔵というけれど、おそらく無というものは、断絶と循環の両面を含んでいるのでしよう。しかもその循環が、ある種の永遠性みたいなものを指し示している。変わらざるもの、それが無常の死、それが人間の死ということではないか。死の契機を欠くと、無尽蔵にはならないということかもしれません。

知事 動きをはらんだ無が、世界の真相かもしれない。生物は自己の複製をつくりと言いますが、実際に生まれてくるものは一つずつ異なります。人間も一人一人ちがう。同じ人は生まれてこない。

山折氏 循環、らせん状の循環ですね。

知事 循環ですが、新しいものが生まれる創造性をはらんだ、らせん状の循環です。

山折氏 無一物、無尽蔵というけれど、おそらく無というものは、断絶と循環の両面を含んでいるのでしよう。しかもその循環が、ある種の永遠性みたいなものを指し示している。変わらざるもの、それが無常の死、それが人間の死ということではないか。死の契機を欠くと、無尽蔵にはならないということかもしれません。

知事 最後スキ間を開けて描く。禅僧の境地の側面を指し示すロゴマークですが、勢いをスツと止めたり、脇にそらしたりする。一円相は、円相でありながらどこか欠けている。

知事 動きをはらんだ無が、世界の真相かもしれない。生物は自己の複製をつくりと言いますが、実際に生まれてくるものは一つずつ異なります。人間も一人一人ちがう。同じ人は生まれてこない。

山折氏 循環、らせん状の循環ですね。

知事 循環ですが、新しいものが生まれる創造性をはらんだ、らせん状の循環です。

山折氏 無一物、無尽蔵というけれど、おそらく無というものは、断絶と循環の両面を含んでいるのでしよう。しかもその循環が、ある種の永遠性みたいなものを指し示している。変わらざるもの、それが無常の死、それが人間の死ということではないか。死の契機を欠くと、無尽蔵にはならないということかもしれません。

事長・有馬朗人さんです。有馬さんは、原子核の理論で優れた功績をお持ちですが、現代俳人のリーダーでもあります。自然界の原理を数学で解明してきた理論物理学者が、自己のアイデンティティとして芭蕉以来の俳諧に打ち込まれています。
山折先生の人生を貫いてきたのは親鸞の存在ですね。「教行信証」を読み込んだ本、「歎異抄」における師と弟子の関係、親鸞と道元の比較など、沢山の研究書を著して、文字どおり全身全霊で向き合っていました。それほどに大切な親鸞の全集を手放すというのは余程の決断でしたね。
山折氏 親鸞の主著は「教行信証」というのが定説ですが、あれは比叡山、つまり当時最高の総合大学における論争のための博士論文で、山を降りた途端に半分以上捨てたと思います。その後、彼は越後へ流れ、非僧非俗の沙弥としての流浪の生活の果てに関東へ出て伝道を始める。そして膚で認識するわけです。農民や民衆にとつて「教行信証」は理解を超えている。これではだめだと。そ

れで和讃の世界詩の世界に転じた。それが70、80代の最晩年に彼が一番力を入れた世界。最後は、よく言われる自然法爾で、1、2行の短い言葉で語られています。親鸞は、散文から韻文の世界へ、韻文の世界からもつと凝縮された短文へ、つまり俳諧の世界へ移行しています。
道元の主著は「正法眼蔵」ですが、彼は和歌を詠み続けた。川端康成もノーベル賞の記念講演で使ったのは、道元の歌、「春は花夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 涼しかりけり」でした。「万葉集」や「古今集」以来の季節感、自然観を踏まえた調べです。道元も散文から韻文へ、韻文から詩を経て、最後は俳諧的な世界へ移っていきます。
五七五は、万葉時代にできあがっています。言葉の凝縮された美しい形ですね。これは呼吸のリズムでもあると思います。生命現象のリズムと言ってもいい。我々の立ち居振る舞いのすべてのリズム。そうなるとうまく事が運ぶ。ずっと日本人の暮らしの中に息づいています。

知事 日本には無文字の時代が長くありました。物事を音声で伝えようとすると、語りにリズムがあると伝えやすいし、聞きやすいし、覚えやすい。物事はリズムと呼吸がぴったり合う音声で伝承されたと思います。リズムのある音声とは歌謡で、それが日本の古層にある。この国でいにしえから受け継がれてきたのは、五七五のリズムをもつ調べに収斂する和歌ですね。
山折氏 親鸞の和歌は、歌謡と表裏一体。相互に影響があります。それを親鸞の余技としてしまうのは、とんでもない話。今日の人文学が大いに反省すべきことでしょう。親鸞の少し前に登場した西行も出家して妻子を捨てますが、和歌の道は捨てなかつた。宗教と芸術の二股をかけた。親鸞は僧と俗の二股。曖昧で重層的な人生の作り方、聖俗両方の世界に出入りしながら暮らしを立てる生き方です。芭蕉も姿は出家ですが、「俗にして髪なし」と言っている。これは親鸞の「僧に非ず、俗に非ず」と同じ、あるいはかなり近い。近代の入

り口とも言える江戸後期の良寛も自分のことを「沙門に非ず、俗に非ず」と語っている。そういう人生の見方、歴史の流れについての考え方を、戦後の日本人は教わってこなかった。学ぼうともしなかった、戦前からずっとです。
知事 近代日本の教育は、明治の学制の発布以来、中央官僚が管理するようになりましたが、江戸時代の日本には、寺子屋や私塾があつて、子どもは親や地域の大人がしつけ、庶民の子どもは地域の大人に行儀作法から読み書きまで習っていました。洋学を取り入れる目的で明治初頭に創設されたのが文部省。洋学が根付いた現在、文科省は制度疲労をおこしています。

静岡県知事 川勝 平太

1948年生まれ。京都市出身。早稲田大学、同大学院を経て英オックスフォード大学で博士号取得。早大教授、国際日本文化研究センター教授、静岡文化芸術大学学長などを経て2009年より現職。現在3期目。



第1回対談より